鞍裝古實

六十帝國

内閣文庫

函	冊	號	類	
三五	一二	一七二一七		和書
三				架

1711

内閣文庫

函	冊	號	類	
一五四	一二	一七二一七		和書
一〇				架

兵法

内閣文庫

番號	和	17217
冊數	12	(1)
函號	154	174

154-174

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan

鞍装古實例言

一鞍の制作大坪道禅入道以降の差別ハ鞍鐙新書ふ辨せ〳〵故今ゆゑ〳〵説ハ斯ふ説とち沿ハ皇朝上古より鞍装ふ軍陣と常用との別あるおとを像摹ハ蓋黒鞍と云覆輪鞍と云鏡鞍と云銀鞍白鞍金鞍なと云し鞍ハ皆武士衆用の鞍ふしく鐙銜轡鞦轡ふ至るまく一具乃法式あり餝鞍飾馬唐鞍と云ハ元唐客を迎ら所〳〵ため造らゑし如形迚ハ唐土乃制式を摹擬

浅草文庫

せらるゝを云ふ〳〵く　皇朝武備乃具よあ〳〵に
和鞍（サヤト）と云ハたゝ唐鞍ゝ對〳〵云乃ミ弦也共
唐鞍和鞍い乘用乃裝飾ふ〳〵軍用の裝飾ふ非
を其の用ふる具ゝ也又自ら別あり混とへき
ふあ〳〵に
一鞍ふ兵士甲冑〳〵乘用ゝるとゆ（ヒトキヌ）珍（ウヅ）袴〳〵乘用
ゆ弦と二種あるハ甲冑〳〵握（ト）る者と中（エボシ）
袴（ハカマ）ち〳〵執（トル）者と二制あると同〳〵中袴〳〵執（トル）
い中鶴（アタリ）と威儀（シヰレイ）を立と〳〵甲冑〳〵執ゝハ貫革（カタモノ）

と必獲（ヰトメ）を立と〳〵甲冑ち〳〵乘用ゝ鞍ゝ前後輪
を高〳〵夜〳〵造ゝ箭を防禦（フセ）を要と〳〵猶意
ゝ満（ミタ）さ也い鐵を以〳〵ち也を覆（ツホ）ふ前後輪を覆（ツホ）
ふゝ絲ゝ覆輪と云名あり又輪乃耳（ミミ）のこふ
加ゝ〳〵たい耳覆輪と云弦〳〵覆輪の鐵を磨（ミカ）
のさるゝと黑（クロ）鞍と云磨（ミカ）ゝさ也は錆（サビ）を生じ俗〳〵
ち也を素漆ふ〳〵塗〳〵と素漆鞍と云又磨（ミカ）きた
ふた鏡鞍と云猶磨（ミカ）きゝ大ふ臑当（スネアテ）を光臑当（カヽミスネアテ）と云
かゝ〳〵鋼を以〳〵覆輪と〳〵又銀滅金（ギンメツキ）金滅金（キンメツキ）

よせて鏡鞍と云は才二義と云へし

一軍防令に弓馬と並称きしを弓射る術と馬を馳る藝を云ふはあしく伝ふいと歩射ふしく言を

騎射ハ弱ふよ歩射乃式ハ上古乃體配きく

よ古代騎射ハきく同しくきく中古の法式を

伝へふと同しく馬を馳る法も大坪廣秀八條

房繁等の流派よりを外に同てはし鞍鐙の制も

亦其の用ふる処よりよりく異なる理あり拙る

をきを講とる人ふきい何ぞや信充不敏少

小より武學を講せんとを庶幾し今既に六旬

よ過て却て是を忘れに十餘年一日乃如し

聊同見乃及人知を祀しく後乃學者よ照ると

云尓

嘉永二年八月

栗原孫三郎信充謹識

鞍装古實例言終

鞍装古實總目

巻第一
兵士常用鞍装
兵士軍用鞍装
巻第二
和鞍装束
巻第三
後鞍装束

国立公文書館
National Archives of Japan

巻第四
唐鞍装束
巻第五
貶鞍装束

鞍装古實總目終

鞍装古實巻第一

栗原信充著

兵士常用鞍装

兵士常用乃鞍装と云い馬髪まかけ
を鞍ハ水干鞍切付いあせらし皮上蒲同皮
或獅子面皮力皮獅子皮ふく上を包む伏組
あるいし樂ハ荒くけ緩野沓腹帯鐙ハ白
鐙舌長(シタナカ)内々乃時ハ常の鞍手綱腹帯ハ褐布(カチン)
又ハ淺黄掐差縄白淺黄褐布(カチン)之色打交(マセ)引差

縄白鞦糸組乃敵或々総を著泥障ハ熊皮鞭
ハ熊柳と云ふ布衣記 也ハ永仁乃頃の系図か
也ハ嘉永己酉より五百〆十餘年系より出る
當時北面瀧口お仕乃時の装飾と云北面と
云瀧口と云ハ乃實ハ衛士ハ乃清涼殿乃北
廊を瀧口廊と云雲圖抄五節御前儀裏書 又瀧口陣と云
有職抄 寛平御時衆十人若廿人を置る時ハ隨
て議せらるゝ西宮記 と云永保元年十二月十
八日瀧口廿人ハ乃仍而本所板敷東二間敷
屏らを大盤一脚を加ふ大記 と云ハ因て考ふ
也ハ白河院乃御宇ハ三十人と為さ給て
と閑に然最初衆十人若廿人を置と為也ハ
瀧口衆と也本所衆とも云ハ故ハ絶ハ
累々所衆と云ふ左經記ハ寛仁二年
五月十二日冬内瀧口所戸屋中雑仕女頓死
仍呂仰瀧口等令候其邊兼又呂誡左衛士
等入夜自北陣取出とゝ也寛仁乃後一條院
即位乃年ハ乃記乃意ハ瀧口所雑仕女頓死

せ〜ふよりて瀧に充ち其のてふよりて検問ち
あらへ乃至は頓死女乃邊よりあらせ左衛
士を喚上て瀧に充觸織の代とおせ〜なり
是ふく瀧にと衛士と其のふ同〜きを考
知へ〜瀧に飛乃勤方を日中行事ふ格よを
下さ彩〜後名謁の下をあり義人に孫庇清涼殿の
孫庇乃南の端よ尻をかく殿上人上乃戸に
に六位上乃もとよ侍に瀧に北乃戸より入
て前庭よ立六位義人上首乃前よ進く誰と

云各瀧に飛名謁に六位を姓を加ふ六位の瀧にを
源競平忠世の類六位以下い六位義人一人
たく競忠世と名乗なるへ〜
孫庇を北へ歩こ彩く二間乃前芸端よりを才
こ乃板敷乃上よ跪きて誰々侯ふと云瀧に
弦打たく各名謁を唱ふ瀧に乃戸より出く
門藉の警ちら〜く北乃陣よりもそく所
處乃門藉御湯殿乃もたま殿上にをふく
中巡りもを其の職なり日本記畧よ瀧に陣
雑仕女於所欲頓滅と云明月記ふ内裏瀧

に本所屋顛倒なりと云い瀧に陣ふ候せし兵
士を本所經たるふ侍と云ひ一谷ふく平家の
兵士等ゝ平ふと名謂(ナヅル)を本所經たるふ名あるふ
侍と称せし(源平盛衰記)と合考ふへし平ふ季重
瀧に本所ふ候したまは本所經たるふ侍と云
又武者所と云武者所もまもち瀧に陣なる
とも推ゝ知へし二歳祐經十又歳より武者
所ふ奉仕しせ一歳ふゝ武者乃一臘(イチノ冬)なる
ゝ二歳一臘と云(曽我物語)も伊豆國乃兵士ゝ京
上ひしゝ瀧に陣ふ候せしふまは拔の身い
兵士たるふとを免まふ又北面と云は清涼殿
乃北面たる瀧に陣ふ伺候もるを以く形ろ
拔ろゝきは北面瀧に等乃乘用る鞍裝もる
ゝち上古兵士乃具とおふしゝを說とまく
を

鞍　水干鞍

鞍ハ水干鞍と云ふく甲冑鞍あるを勿論し
水干と云ゝ紗ふくも平絹ふくも生絹ふく

も他ろ又色も白くくも何ふくも（桃華葵葉）と云
ひ但清少納云枕草紙ふ隆光ゥ多級助なる
も青色乃紅の衣（キヌ）摺度（モド）ろかゝたふ水干袴ふ
くと云ハ水干のてゝふはあゝて袴乃名形ろ
蓋水干とゝハ水干と云易衛卦乃註ふ干ハ大
水乃旁故停水乃處を云とあるを形ろ狩ハ
袴乃猥短く地を曳さふ形水干を約ふ便ふ
ふゥ故ふ水干袴乃名ある形らん今云水干
も亦将衣ふ比とも是猥短く菊綴を著たろ

浄衣とお形ゝくもく菊綴と袖括を加ふ但
前後乃長同ゝくゝ乃下ふ曳を因く水干衣と云
ふふへゝ軍防令衣服令ふ就く考ふ也ハ兵
士乃服を衫（ヒトヘキヌ）と云兵衛乃服を襖（ヲ）と云襖を曲
領ふ製せゝを浄衣と云浄衣ふ菊綴ゝ袖括
もゝふを水干と云上古兵士乃常服なろ之
浦大介義明頼朝卿乃御使と因く白き浄衣
ふ立烏帽子をてかゝ（源平盛衰記）と云頼朝卿文
覺上人ゝを院宣を持ゝき手水うかゝ為

て浄衣ハ紐付〳〵かゝゝゝを披見ゝと云ハ浄衣ハ敬禮の意あり治承四年四月廿七日高倉宮乃令旨を披閲の時ゝ頼朝々水干を着〳〵ゝ（同上）

同年十二月十二日大倉館移徙ゝゝゝ十六日鶴岡参詣ゝもハ騎馬ハて水干形ゝ国〳〵弥水干ハ騎馬ハ便なる服たゝを出る因兵士常用乃服たゝを用かゝゝゝゝ〳〵水干鞍乃古きも乃数種あるゝ〳〵ゆ〳〵〳〵管見の及ハ拙を出るゝを左乃如〳〵

鐵地覆輪紋獅子牡丹鞍

前輪馬表一尺一寸

鞍高九寸又分餘

凡長七寸一分弱

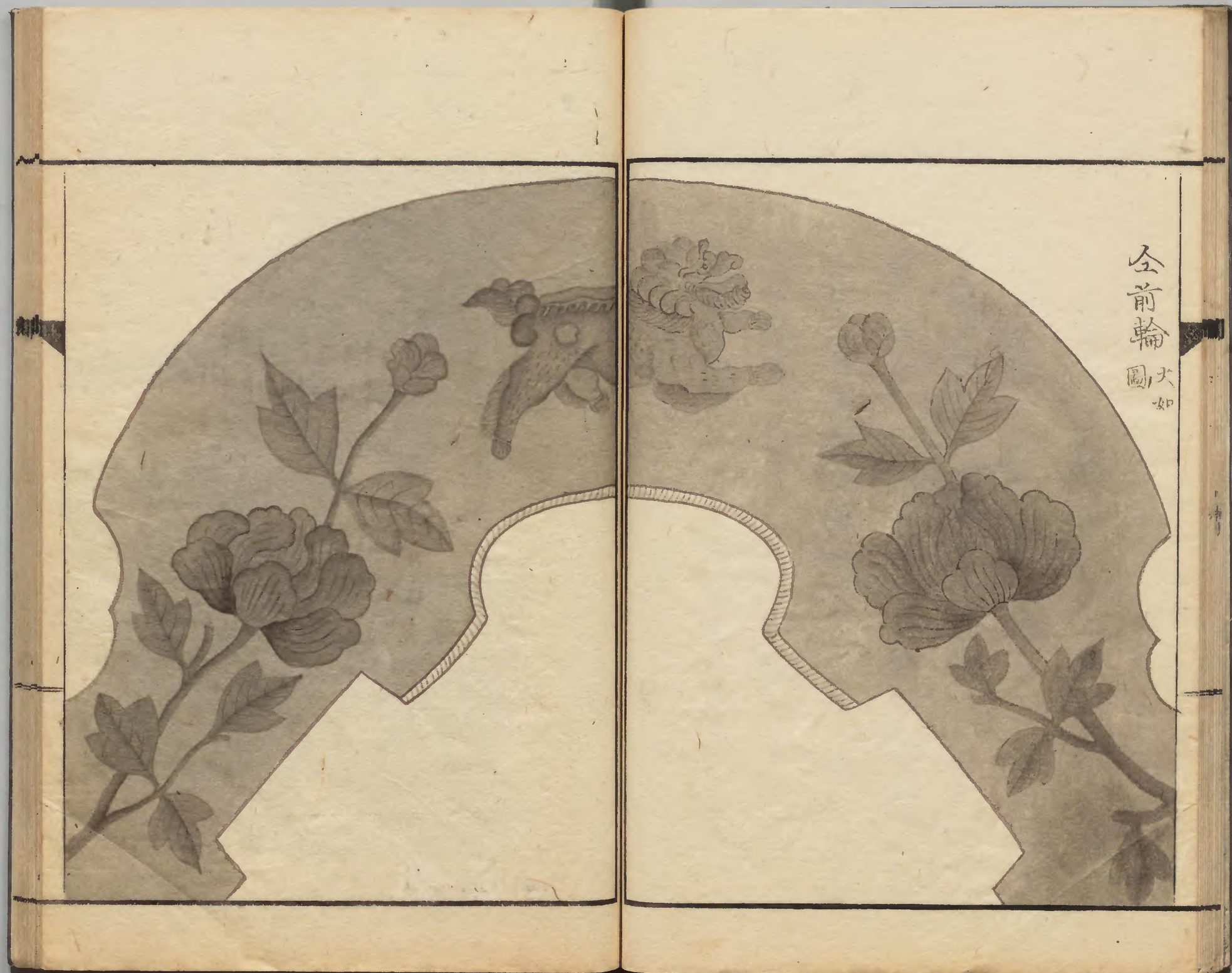
鞦ハ二寸三分

後輪馬表一尺二寸七分

鞍高一尺一寸

凡長八寸九分

由木 材合（ガタ）飯 破壊 永禄三年八月日



仝前輪 大如圖

仝展木

仝爪

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan

今後輪折目

此鞍鐵を以て覆輪したるを即上古黒鞍乃遺制なりと其制作乃規矩は水平鞍形なり其作者を考へる迄は伊勢殿河内貞雅作なる但前輪は派田勘解由左衛門尉清延入道元清の判あり迄は茶輪の損ぜしを元清の補ひたるなり覆輪の貝雅の時より制せし物とぞ　展木も損ぜし故因人乃補いる形なり　帝覇の名物とぞへし獅子牡丹乃紋様を以て考へる迄は桜井國源氏多田頼綱一流乃人の鞍ならんか

鏡鞍

諸鞍日記ニ鋼を外ニ打くゝかけ〻覆輪を懸たるを鏡鞍と云ふ鋼ハ各〻彼を打〻付〻ることゝ也即武藏國秩父郡御嶽寶藏院文暦元年奉納の鞍をよひ尾張國熱田神宮寶藏寶德二年千秋持季使覆の鞍等これ日記に說ハあへは明衡往來ニ加茂祭使の用ハとある鏡鞍餝抄ニ保安元年二月十日雪見御幸ニ白河院乃用ひらるゝけ〻縁ニ敷

物乃鏡鞍なと云も乃是なるへし明衡往来
ふ謂とあるを雲珠杏葉風流乃美を盡し
とあるは祭祠乃使一日晴乃儀ふ〳〵武家
の具を假用ひしふやとも閑也餝鈔ふ所謂
縁堀物乃鏡鞍ハ御禊乃日揚政忠通乃乘用
とかさを赤保二年四月十七日右大將乃乘
用飾抄ふ　日吉行幸ふ之位中將乃用ひらを
資長朝臣記　りふ鏡鞍とおなしくしく白河敎政
討乃次四郎左衛門尉頼賢　為義朝臣の四男　乃用も

の馬ふ鏡鞍おいく乘出しと云鏡鞍とハ各
別かふへし頼賢乃乘用ひし鏡鞍ハ戰場へ
赴く時ふ用ひしを鐵を張くたるを
鞍なるへし飾抄及ひ資長朝臣記等ふ謂鏡
鞍ふハ何も小豹竹豹の韉を用ひら武戰場
へ小豹竹豹乃韉用ひらかへるんや餝抄等
ふ杏葉付しは云戰場へ赴く鞍ふ何の用ふ
杏葉を付へきかは是等乃鞍裝を熟思を武
士乘用の鏡鞍と云卿及ひ高貴乘用の鏡鞍

と其品相同〳〵なるを紀へり

鎌倉右幕下頼朝鏡鞍

前輪

覆輪真鍮

水干鞍の親鉅

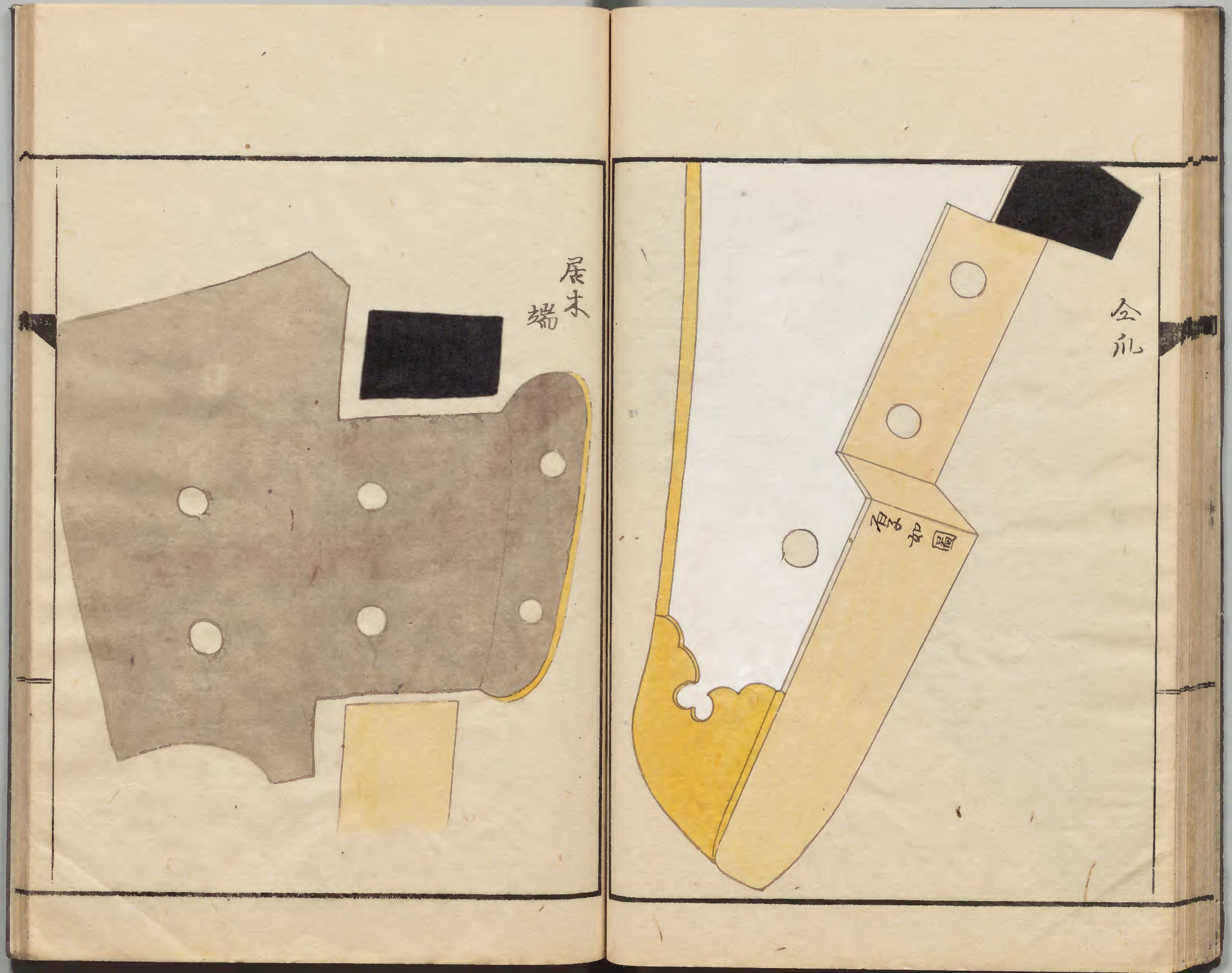
仝後輪

仝展木

国立公文書館
National Archives of Japan

同前輪山形裏 大如圖

国立公文書館
National Archives of Japan



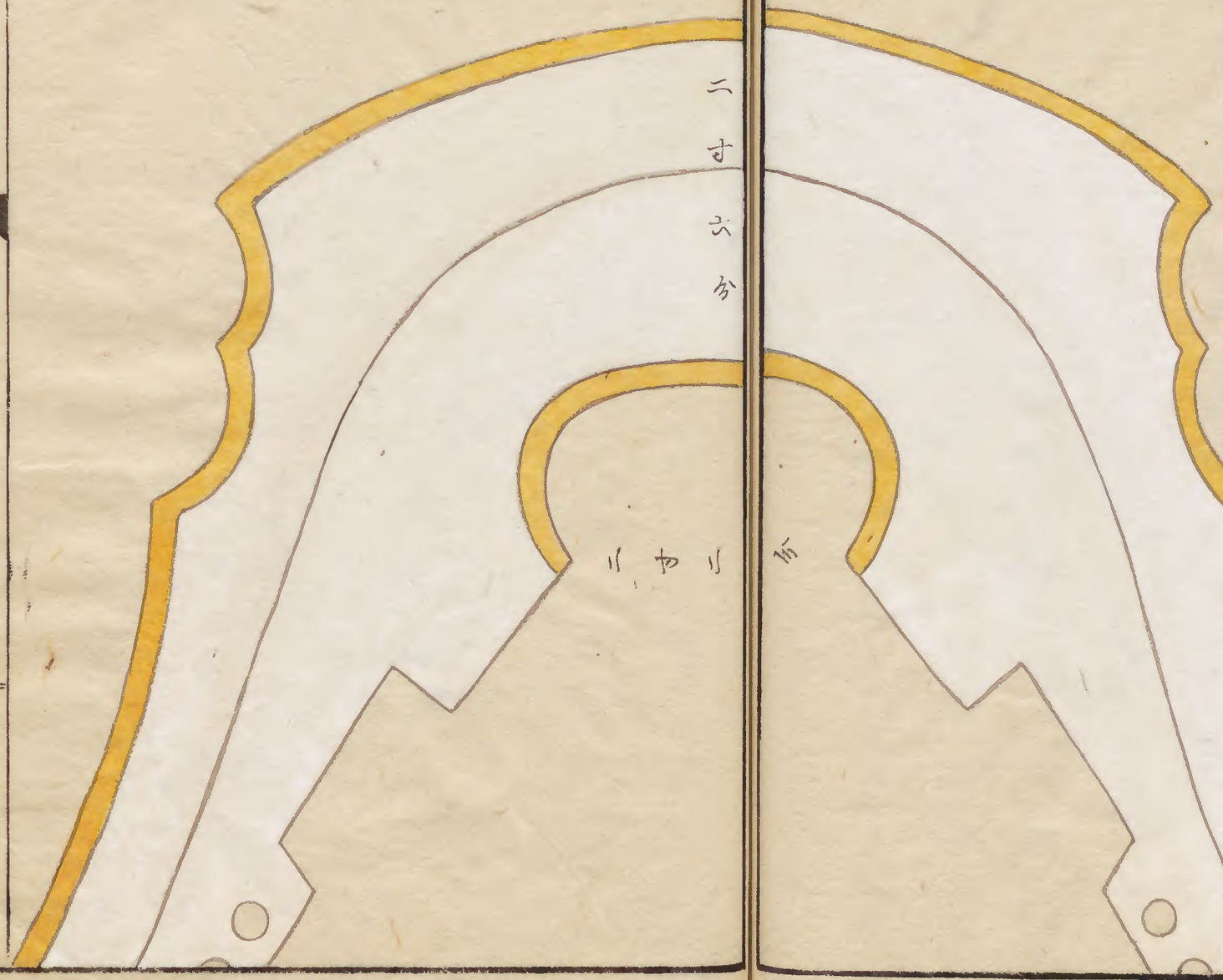
国立公文書館
National Archives of Japan

仝後爪折

又大坪左京亮有成作と云鏡鞍あり後輪損失しゝ居木と前輪乃ミ傳まとり古色伊勢国幡貞重か自筆ふ寫せしおもはゆ古物を見人と云とも亦證とおぼゆ是也乃世の圖を熟思とろふ真鍮をもく前輪を覆ひまゝおかし金ふく耳ふも覆ひゝ乃仝く文暦乃古鞍とおかし形おもとおひ形およひ爪乃規矩ハ水平鞍ゝ乃居木ふ取付乃緒の穴を穿たん

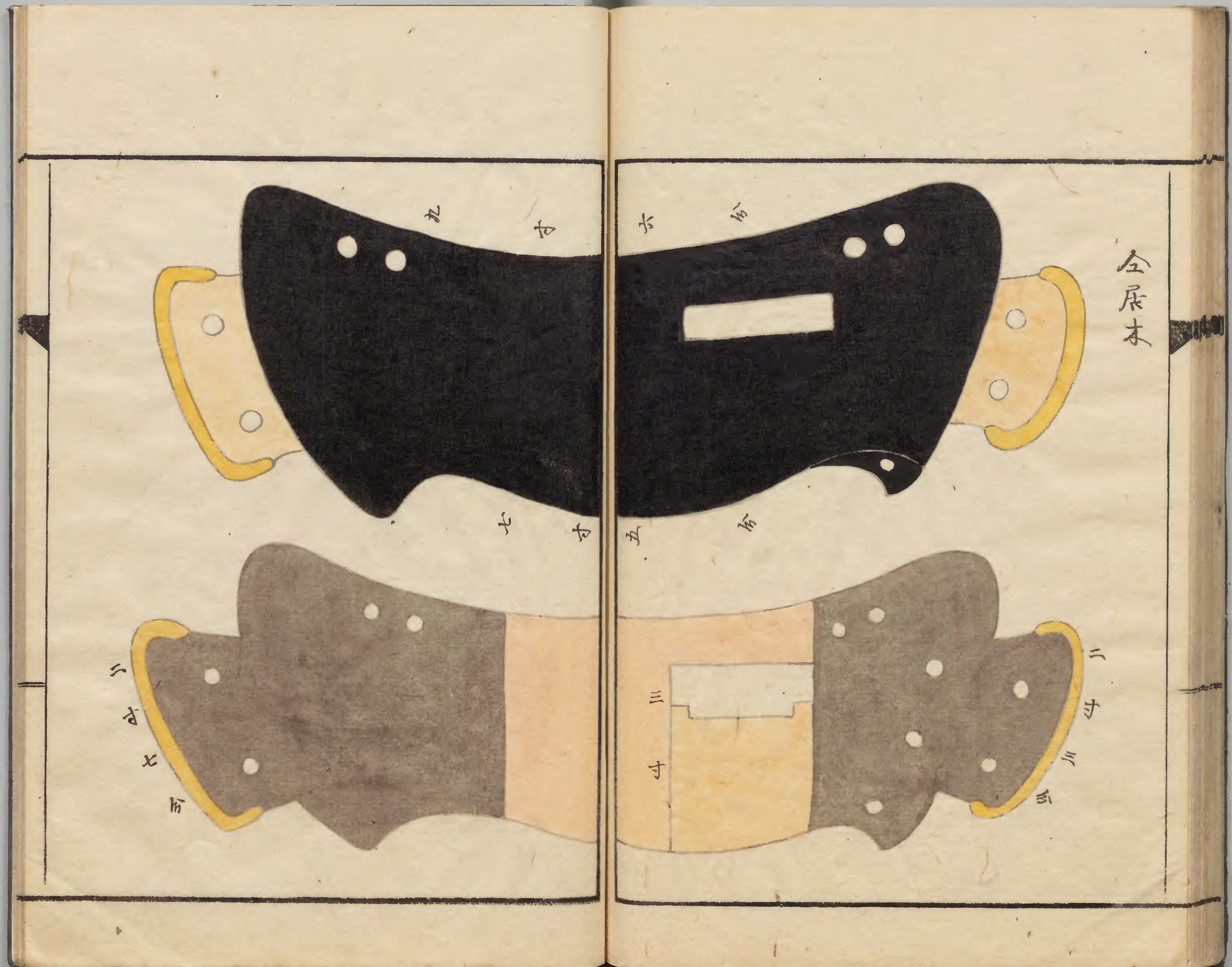
古代鏡鞍

道禪作
大如圖



国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan


仝展木
六寸
九寸
三寸
二寸
三寸
三寸
六寸
九寸
七寸
二寸

兵士軍用鞍裝

兵士軍用乃鞍裝ゝゝ云い鞍ゝゝを入ゝゝ色袋
燈い金箔ゝゝ胸莫ゝたゝ金箔又白くゝ有
へゝ内ゝ朱絲鞦手縄さゝ二重纏乘替ふい
鞍覆敷皮手綱ふゝゝゝゝゝ付ゝと隨兵記ま
ゝ内ゝ書い文明十八年正月ふ書たゝかれ
ゝ永二年ゝゝ元ゝ百六十三年ゝふ
當時應仁乱後都鄙ゝゝふ擾乱の間ゝゝ
文武乃古實ゝゝふ絶せんゝゝ是故人等

を操りあまた記し以て後末ハ示人の意を
含を入て色彩と云い鞍の輪ハ鉄をもつて
拵まふ金銀を以て物乃象を造まふと云水
干鞍乃條ハ記せし獅子牡丹乃鞍の如し上
古ハ黒鞍と云い黒き塗ふく張さまい黒鞍
と云しあらん白き塗ふく張たるを白鞍と
云ハ物語ハ義朝乃白河殿夜討ハ
出立装束を記しく塗籠藤乃弓ハ黒鞍を斧
たり又源平盛衰記ハ梶原源太景季摺墨を

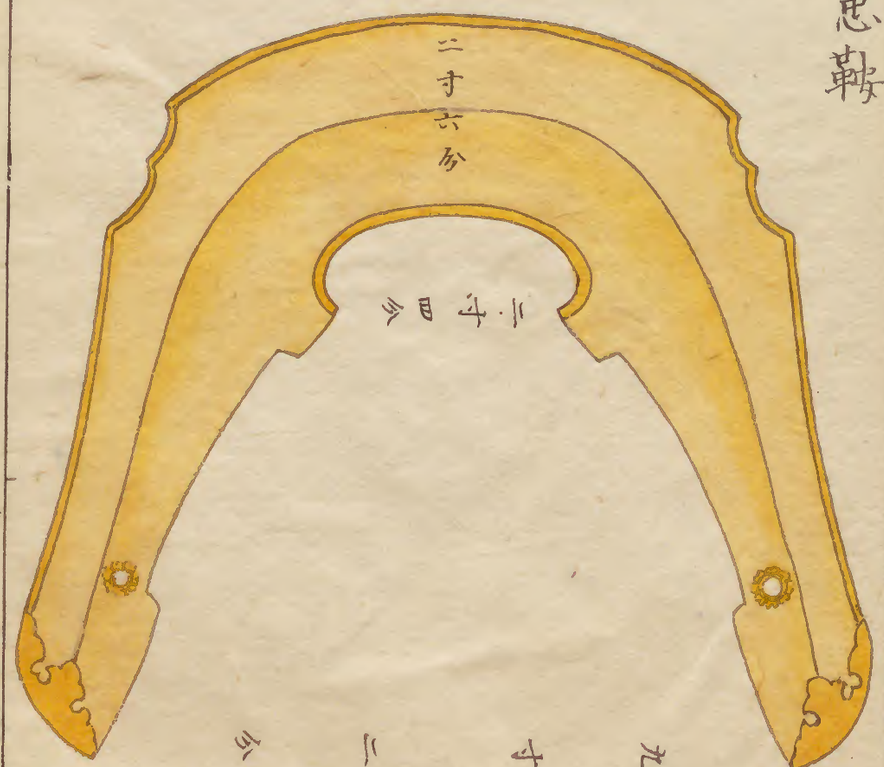
賜りて戦場ハ赴く時黒漆鞍を置と云又
佐々木高綱ハ生好ハ黄覆輪の鞍置と云を
覆輪と云鞍の輪を含ふく覆ひさまい名と
以留ハ重忠乃鞍ハ中ハ金覆輪ハ耳ハ白覆
輪と記せしあく熟思をまは栃木ハ木鬼打
たる金覆輪又ハ丸寄生拵さる金覆輪なと
云も乃平の紋ハあく前後輪乃表ハ丸寄
生と磨き出し栃木ハ木鬼を打出したる者
とあらる拵まい延喜民部省式ハ太宰府黒

漆鞍十具鐵鐙廿雙と云も邊要警衛の具と云殊に鐵鐙に具したまは黒金たもつて漆ぬりし鞍ふくへきを持の理ちかしと云へき形つさくけ黒漆鞍と云も乃に對しく白磨きふみかき立しと鏡鞍と云なりへし弦ふた銀ふくきつて又いた鍮ふくきつなと為い武備の用意を失きし形つへし

平貞盛朝臣鞍

平貞盛朝臣ゝ桓武天皇六代乃孫又ハ常陸
大掾國香（クニカ）と云貞盛天慶三年平新皇將門を
誅しく又乃仇を報ゼ其の人乃鞍なりと云
ハ既ふ九百年余の物とゝへしゝ形乃言さ
と馬夫のせまきてを以く考へ重ハ實ゝ軍
陣の鞍乃古式とゝへき形乃惜むらくハ後
輪と居木と損失ハ

畠山重忠鞍



国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan